

過去15年間の臨床－疾患と診療

「新しいサル像をめざして」(2002)

京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター 編

加藤 朗野、橋本ちひろ

I はじめに

研究所にいる多くの時間を青衣を着て、長靴でサルの飼育場所をぐるぐる廻っている私たちにとって、机にむかって診療簿をまとめるというのは、大事なことだとわかっていてもついつい後回しにしがちである。記念誌を書くからまとめなさいと教官から言われなければ、こんな貴重な資料を改めて見直すという絶好の機会は無かつたらう。

II データ

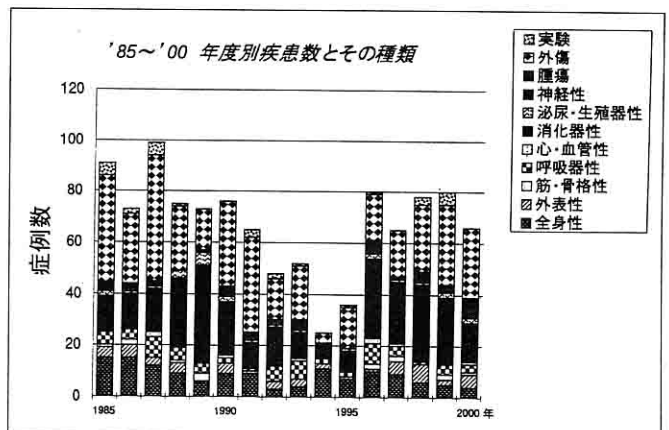
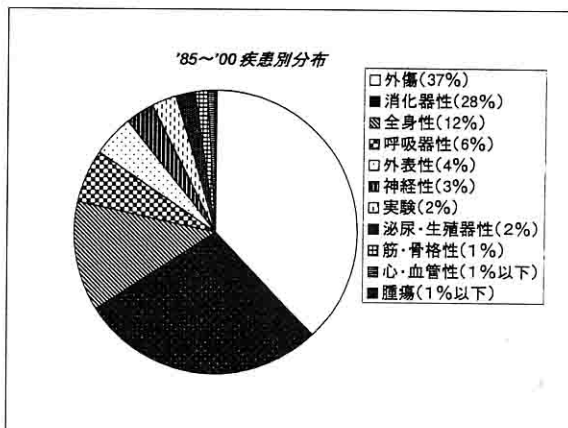
今回の統計は過去15年間の診療簿として記録に残っているものを整理したものである。疾患ザルのいない日はなく、過去には軽微な疾患など記録に残していないものもあり、それらを含めると軽度～重度疾患まで、サルという特殊な動物を手探りで診はじめることから始まって臨床が積み重ねられてきた歴史がうかがえる。

1985年から2000年までの15年間で診療した疾患数はのべ1,082症例で、年間約72例、月約6例で、5日に1例の割合で疾患サルが発生していることになる。

年間の最大保有数(前年度末頭数計+導入+出産)と症例数の比は3～10%である。

疾患の種類は様々であるが、最も多いのは外傷(咬傷、骨折など)で全疾患の37%を占める。以下消化器性(腸炎、胃鼓張症など)が28%、全身性(衰弱、脱水など)が12%、呼吸器性(肺炎など)が6%、外表性(膿瘍、皮膚炎など)が4%、神経性(脳炎など)が3%、泌尿・生殖器性(流産など)と実験に絡み起こった疾患は2%、筋・骨格性(ヘルニアなど)は1%、心・血管性と腫瘍は1%以下と続く。

過去15年を前半・後半にわけ比較すると、外傷と全身性疾患は前半に比べ後半が減少している。エンリッチメントを推進することにより、無駄な噛み合いを防げる環境作りが心にかけていることと、注意深く1頭1頭に気を配る観察によって脱水や衰弱を起こさないようにしてき



た成果と考えられる。その他の疾患については年間症例数に差はない。消化器性疾患は例数が上下している。

サル種別では飼育頭数の多いマカク類が多くを占める。

1992年以降所外からの導入がほとんど無くなったことにより、結核発症('72年以來) やツベルクリン反応陽性例 ('84年以來) はみられない。

Ⅲ. 今後の展望

約800頭もいるサルの疾患を見つける、疾患に気が付くというのは常日頃の飼育や世話を行っている技官や技能補佐員の細かな観察力に頼るところが大きい。なぜなら、サルは獣医が診察に行くと極度に緊張してしまい、病状を隠してしまいがちだからである。研究所の歴史とともに高齢サルも増え、今後はヒト同様加齢性疾患の発生が予測される。診断は視診・触診・聴診が基本であるが、ここ4・5年の間に新たに超音波装置やMRIを活用する場も増えてきた。

今後も、疾患サルの治癒率を高める努力を続け、病気を起こさないように健康管理を続けていく予防医学を啓蒙していくのも重要な役割と認識している。

付録：診療簿より（原図提供：松林清明、加藤朗野、橋本ちひろ）

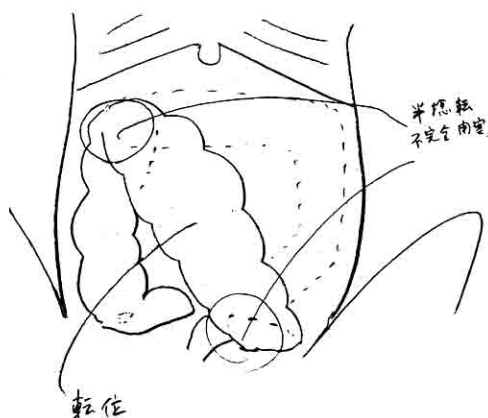


図1 鼓張症（ゲラダヒビ）



図2 顔面腫脹（アカゲザル）

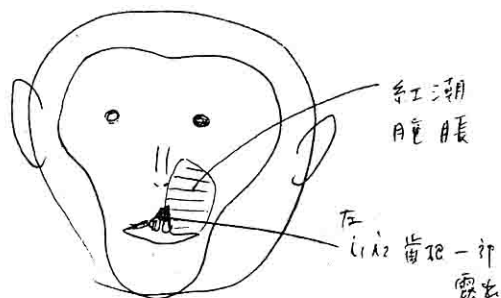


図3 咬傷（ヤクザル）

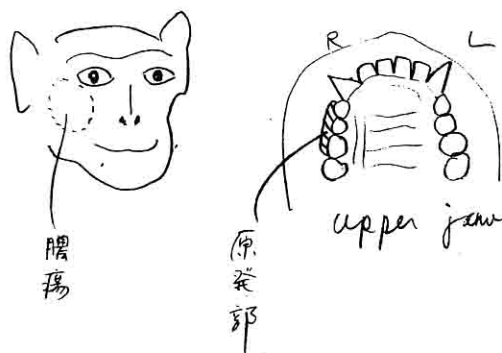


図4 歯槽膿漏（アカゲザル）

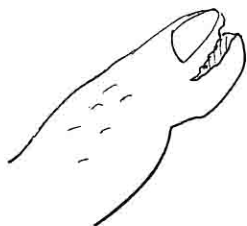


図5 左手示指末端離開 (ニホンザル)

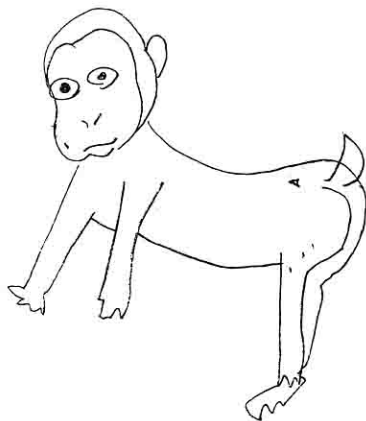
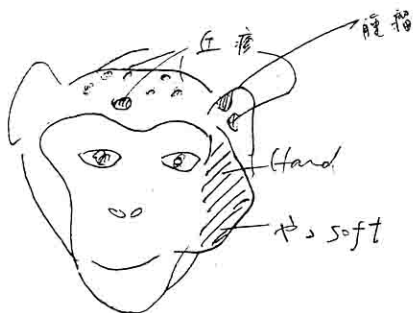


図6 外傷 (アカゲザル)



X-ray 腫脹 ⇒ 肋骨 0. B.

図7 頬部腫脹 (ニホンザル)



図8 外傷 (チンパンジーのアユム)



図9 咬傷 (チンパンジーのアキラ)

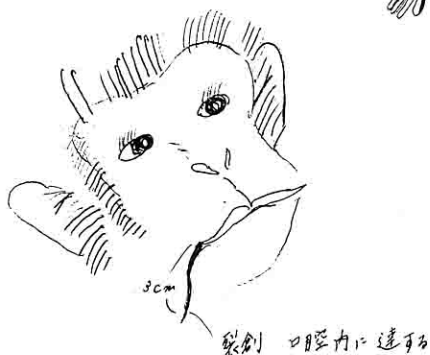


図10 咬傷 (ニホンザル)



図11 外傷 (ニホンザル)